

巨大リスクを思い直して

がん社会 を診る

中川 恵一

ぼつこうがンを自分で検査して発見し、手術を受けてから3年がたちました。

がんは臓器のもっとも表面の上皮から発生して、外側に向かって広がっていきます。

私の場合、表在性の早期がんでしたから、内視鏡切除できました。もし発見が遅れて、

ぼつこうの筋肉の層にまでがん細胞が広がっていたとすると、全摘が必要となり、おなかに人工ぼつこうを作ることになってははずです。お正月は熱海で過ごすほど温泉が

好きな私には、少しツライことになったでしょう。

がんは症状を出しにくい病気です。まして、早期では、ほとんどの場合、自覚症状はありません。ぼつこうがんも同様ですが、痛みを伴わない血尿が8割のケースで見られ、早期発見のサインとなります。しかし、私の場合、顕

微鏡で分かるような血尿もありませんでした。

お酒好きの私は、自分で肝臓や膵臓(すいぞう)の超音

波検査を定期的に行っていました。そのついでにぼつこうもチェックして、たまたま、早期のぼつこうがンを自己診断したというわけです。もっとも、ぼつこうがんの発症原因で分かっているのは喫煙だけ。私が発症したのは、「運が悪かった」としか言えませんが。

発がんの原因で最も重要なのが、細胞増殖に関係する遺伝子の「偶発的損傷」です。がんは運に左右される病気と言ってもよいでしょう。ただ、

禁煙、節酒、運動などを心がけることで、発がんリスクは大きく低下しますし、運悪くがんができて、早期発見で9割以上完治させることができます。

コロナ以降、在宅勤務による座りすぎ+運動不足、検診自粛による早期発見の遅れで、これから進行がんが増える

ることになり、心配です。

ぼつこうがんの内視鏡切除は2018年12月28日に東大病院で受けました。前日の勤務後に入院し、31日に退院しましたから、4泊入院で、1月4日からは通常の勤務でした。がんは早期に見つけることで、治癒率が高くなるだけでなく、仕事や生活に与える影響も少なくて済みます。

4泊とはいえ、初めての入院生活では大きなストレスがたまりました。現在流行が懸念されている新型コロナウイルスはデルタ株と違って、のどなどの上気道で増殖しやすく、症状が出にくいのが特徴です。症状がないままの入院などはメンタル面のサポートも必要でしょう。

オミクロン株は重症化や入院のリスクが低いことが明らかになりつつあります。コロナ禍からの出口が見え始めた今、年間死亡38万人というがんの巨大なリスクを思い直す必要があるでしょう。

(東京大学特任教授)

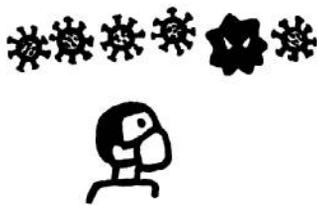


イラスト 中村 久美